

宝くじ おもしろ話

宝くじ販売「たばこ店」の 店舗数に見る宝くじの歴史

「宝くじ」の前身の「勝札」が全国で発売されたのは昭和20年7月。前例のない「新商品」を発売するにあたり、管轄の大蔵省、さらに発売業務を担当した日本勧業銀行としては苦労の連続。中でも「どこで、どう売るか」という「発売網」が一番の難題。そこで頼りとしたのは、すでにある他の組織を利用することだった。

その代表的な組織が全国の煙草販売組合だ。いまなお宝くじ販売とご縁の続く「たばこ店」

だが、宝くじを販売するたばこ店が現在、全国にどれくらいあるか、時代を追ってその推移を調べてみた。※%は全売り場中で占める率

- 昭和25年（1950年） 49,341店（92.0%）
- 昭和42年（1967年） 6,921店（80.5%）
- 昭和60年（1985年） 4,862店（47.8%）
- 平成7年（1995年） 2,370店（23.6%）
- 平成12年（2000年） 1,943店（0.15%）
- 令和3年（2021年） 412店（0.03%）

当初と比べて「100分の1以下に」といった「激減の歴史」だが、この数字の陰には時代の変化、人々の暮らしぶりの変化、そして「宝くじ」そのものの大いなる変化がある。



宝くじ おもしろ話

ビックリ&感心!店頭で 見かけた開運グッズ2つ

夢の商品・宝くじの販売店の店先で、アイデアあふれる開運・縁起グッズをよく見かける。そうした中で「これは傑作!」といった「開運・縁起グッズ」を2つ紹介しよう。

「金のわらじ」 ケースに手作り「金のわらじ1足」を納めて、店の正面・真上に飾っているのはJR東海道線・戸塚駅構内の戸塚駅西口チャンスセンターだ。ヒントは同駅近くにある「南谷戸の大わらじ」だが、展示したのは約20年前。東海道の「戸塚宿」は江戸・日本

橋から5つ目の宿場町で、朝に江戸を立てて最初の宿泊地とか。そこで「幸運の女神」にも、この戸塚宿で「わらじを、ぜひ脱いでもらおう」と、翌朝のご出立用に、新しい金のわらじを用意したという次第。お客さんは購入した宝くじを「わらじ」に向けて、当せん祈願している。

「夫婦・松ぼっくり」 店内正面の棚に社殿風の置物があり、中に祀られているのは「松ぼっくり」だ。まるで夫婦のように1つ枝から左右に1つずつの計2つ。1つの大きさは直径8cm、長さ14cmほどと巨大。社殿に納められたのは15年前から。松本市の「市の木」は赤松で「よく育つ」ことから「めでたいこと」のシンボルとか。「宝くじを買って、大きな開運・待つぼっくり」というお客さんもいて好評だ。



宝くじ おもしろ話

「宝くじ新星歌手」の五木ひろし 「松山まさる」でデビュー当時に

昨年8月に新聞の連載コラムで歌手・五木ひろしが書いていた。昭和40年、17歳の時に芸名「松山まさる」でコロムビアレコードからデビュー。その後、芸名を5つも変え、昭和46年に「五木ひろし」として歌った「よこはま・たそがれ」が大ヒットしてスターダムに。昨夏はそれから50年目だったという。

ところで「宝くじの当せん」の夢見る宝くじファンと「明日のスター」を夢見る新人歌手とは「ともに夢を追う」ということで、同じお仲間。そこで

公会堂などで開催の宝くじ抽せん会のアトラクションへ新人歌手に出演依頼。そして、明日の大スターを夢見る彼らを「応援しよう」ということで、日本勧業銀行宝くじ部では宝くじの宣伝企画として昭和39年8月に「宝くじ新星歌手」を誕生させた。

これは2つのレコード会社（コロムビアとビクター）から新人歌手を6人ずつ選出。任期は1年だが両社とも半数ずつ4月と9月に交代（初回の半数だけ任期半年）。最初の舞台は昭和39年9月5日に仙台市の宮城県民会館で行われた「第290回関東・中部・東北自治宝くじ」の抽せん会だった。その後、宝くじ新星歌手は昭和54年度まで続き、総数154人にも。その中には五木ひろしをはじめ、加賀城みゆき、山本譲二、日吉ミミ、松田聖子らがいた。



ご当地クーちゃん

信楽焼たぬきクーちゃん